

経済的ロマン主義と政治的ロマン主義

山崎 好裕

福岡大学経済学部

WP-2021-001



福岡大学先端経済研究センター

# 経済的ロマン主義と政治的ロマン主義

山崎 好裕

## 概要

現代日本に見られる経済政策論の混乱やコロナ禍に有効に対処できない政府の混迷を、ロマン主義の陥穽から説明できるのではないか。これが本稿のアイデアである。ロシア革命の前、シベリアでの流刑のなかにあったレーニンは、ナロードニキと、その思想の元になったシスモンド・ド・シスモンディの経済的ロマン主義を批判する論文を執筆した。シスモンディはその過少消費説的な恐慌論で市場経済の孕まざるを得ない矛盾を指摘しながら、経済学的な分析を放棄して空想的な小農生産への回帰を主張した。レーニンによれば、それは経済の将来展望を持たない思考停止状態なのである。カール・シュミットは、それ自身が政治を放棄した空虚な言説である政治的ロマン主義を批判した。シュミットによれば、それは近代市民社会が未成熟なドイツに典型的な現象である。近代合理主義の冷徹な因果論を拒絶する思考は、自我というものの肥大化をもたらし、他者の抵抗を空想的に排除して観念の王国を築き上げる。現代日本にも蔓延するロマン主義的傾向を克服するには、幻想や願望を論理に置き換えることなく、現実を見据えた経済的・政治的な議論を積み上げていくしかないであろう。

JEL 分類番号：A120, B120, N440。

キーワード：レーニン、シュミット、経済的ロマン主義、政治的ロマン主義、リアリズムの欠如。

# Economic Romanticism and Political Romanticism

Yoshihiro Yamazaki

## Abstract

The author thought confusions in economic policies and malfunctions of its government against COVID-19 in Japan could be explained from unproductiveness of romanticism. Lenin wrote a paper which criticized Simonde de Sismondi's economic romanticism as an attack against Narodniks in his place of exile, Siberia. Sismondi pointed flaws of market economy through his underconsumption theory of crisis. However, he also abandoned economic analyses and returned the fantasy of small farming society. Lenin wrote Sismondi fell into the cease of thinking. Carl Schmitt criticized political romanticism which is vacant discourses of abandonment of political actions. He said that is a typical phenomenon in Germany where modern civil society was not matured. The thinking style that rejects strict causation of modern rationalism raises egos bigger and builds a kingdom of ideas excluding the others' oppositions. The tendency of romanticism now prevails in Japan. We have to repeat economic and political discussions gazing at reality without replacing logic with fantasy and desire.

JEL classifications: A120, B120, N440.

キーワード : Lenin, Schmitt, economic romanticism, political romanticism, lack of realism.

はじめに

ロマン主義を定義するとすれば、ひとまずリアリズムの欠如ということになるであろうか。ひとまず、としたのは、考察の前であるからである。それは近代合理主義への批判の運動として勃興し、現実を乗り越える何かしらを求めていた。

もちろん、ロマン主義的な言動は過去のものではない。21世紀の現代においても、経済的な文脈、政治的な文脈ではロマン主義的な思考方法を散見することができる。本稿は、そうしたロマン主義の輪郭を批判的に切り出すことを目的としている。

導き手となるのは、ロシア革命の立役者であるウラジーミル・イリイチ・イリヤノフ、通称ウラジーミル・レーニンと、一時期ヒトラーのナチス政権を積極的に支持した政治学者カール・シュミットである。

レーニンはシベリアに流刑中の1897年、農本主義的な社会変革を訴えるナロードニキを批判する論文を執筆した。これが「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」である。ナロードニキは小規模な自作農の創成を政治的スローガンとしていたが、これはスイスの古典派経済学者ジャン＝シャルル＝レオナルド・シスモンディの主張と同じである。そこで、レーニンはシスモンディ主義者が多かったナロードニキを、シスモンディもろともに批判したのであった。

ワイマール共和国時代の政治情勢を背景に、独自の政治学的主張で頭角を現していたシュミットは、1919年に『政治的ロマン主義』を公刊した。さらに大幅な増補版が1925年に出版されている。シュミットはドイツ市民層の批判すべき特性をロマン主義と捉えており、そのプロテスタント的な思考方法を同書で批判したのであった。

奇しくも両者は20世紀の初頭に、それぞれ経済の部面と政治の部面でロマン主義批判を行ったのである。本稿では、それぞれのロマン主義の特徴づけを詳細に読み解いた上で、両者の比較対象を行い、ロマン主義への批判的な総括を行いたい。そして、そのなかから、現代におけるロマン主義的思考方法の危険性を指摘していきたい。

## 1. レーニンによるシスモンディ批判

レーニンは論文のなかで、シスモンディの経済学をロマン主義の経済理論と呼び、これに事細かな批判を加えていく。

資本主義が発展すると国内市場は縮小するというこのシスモンディの理論は、いったいどういうことに帰着するだろうか？それは、この理論の創始者が、わずかに問題を直視することもなく、資本主義（すなわち「商業的富」に工業と農業の発展における大規模企業経営をくわえたもの。というのは、シスモンディは「資本主義」という言葉を知

っていないからである。これらの概念は同一であるから、こういう言葉の使用法はまったく正しい。そこでわれわれは、これからさきは、たんに「資本主義」ということ(にする)に照応する諸条件の分析から避けて、この分析のかわりに、自分の小ブルジョア的な見解と小ブルジョア的な空想とをもち出した、という結果になっている。商業的富の発展、したがってまた競争の発展は、「適度な安楽」と作男にたいする家父長制的関係とをもった平穏な中位の農民を、神聖不可侵にしておかなければならないのである。<sup>1</sup>

シスモンディが重視している小規模農業生産は、中農を理想化したイメージであるが、実際には資本主義経済の発展によって没落しつつあった。しかし、シスモンディは彼らに担われた経済を理想化していたのである。

彼はつづけてこう言っている。「もし生産が徐々に増大していくならば、年々の交換は、将来の条件を改善するとともに、微弱な損失をひきおこすにちがいない。もしこの損失が軽微であり、うまく配分されるならば、各人は…困窮することなく、その損失にたえるであろう…だが、もし新たな生産と先行する生産とのあいだに、大きな不均衡が存在するならば、資本はそこなわれ、窮乏がおこって、国民は進歩するどころか退歩する」。資本主義にたいするロマン主義と小ブルジョア的な見解の基本的命題を、この長談義のなかでかたられているほど浮彫的に、また率直に言いきることは、むづかしい。蓄積が、すなわち、消費にたいする生産の超過が、早くすすめばすすむほどそれだけよい、と古典学派の人々はおしえた。彼らは、資本の社会的生産過程を解明することはできなかったが、また、社会的生産物は二つの部分からなるかのようにいうスミスの誤りからぬけきることはできなかったが、それにもかかわらず、生産それ自体が自分のために市場をつくり出し、それ自体が消費を規定するという、まったく正当な命題を提示していた。そしてわれわれの知っているように、マルクスの理論も、蓄積にたいするそのような見解を古典学派からうけ入れたのである。すなわち、この理論は、富の増大が急速であればあるほど、労働の生産力と労働の社会化とはますます完全に発達し、労働者の状態も、それがこの社会経済制度のなかでよくなりうるかぎり、ますますよくなるということのみとめたのである。ところが、ロマン主義者たちはまったく反対のことを主張し、すべての希望をまさに資本主義の微弱な発展ということにかけ、資本主義の停滞を歓迎するのである。<sup>2</sup>

シスモンディはアダム・スミスの影響のもとで経済学を始めたが、同時代のイギリス人デイヴィッド・リカードウやフランス人のジャン＝バティスト・セイと真っ向から対立した。

---

<sup>1</sup> レーニン (1897)、翻訳 119-120 ページ。

<sup>2</sup> 同上、129 - 130 ページ。

生産、あるいは供給が自らの需要を生み出すというセイ法則は、レーニンも書いているように古典派の主要な見解である。生産された財貨と同じだけの金額の国民所得が生み出されているのだから、その所得を支出して生産された財貨が購入されれば、需要の不足は生じないはずだからである。

そうした見解に対して、シスモンディは、生産が急激に増大した場合、労働者や資本家の消費がそれに追いつかないために需要不足が生じる結果、恐慌が発生するという批判を行ったのである。これは、需要の前提に生産があると同時に、生産の前提に需要があるという同時決定的な考え方を持たず、時間経過のなかで数量を考えていくことで生じてくる発想である。<sup>3</sup>そして、そこから、シスモンディは成長スピードの遅い小規模生産経済の安定性を称揚するのである。

誤った理論からの第一の誤った結論は、蓄積にかんしてである。シスモンディは、資本主義的蓄積を絶対に理解しなかった。それで、彼がこの問題についてリカードーとかかわした激しん論争においても、真理は、本質的には後者の側にあった。リカードーは、生産それ自身が自己のために市場をつくり出すと主張した。ところが、シスモンディはこれを否定し、そしてこの否定にもとづいて、自分の恐慌理論をつくりあげたのである。なるほど、リカードーもまた、スミスの前期の基本的な誤りを訂正することができず、だからまた所得と社会的資本との関係の問題および生産物の実現の問題を解決することができなかった（リカードーは、これらの問題を提起することさえしなかった）。しかし彼は、ブルジョアの生産様式の本質そのものを本能的に特徴づけて、蓄積は所得にたいする生産の超過であるという、まったく争う余地のない事実を指摘した。最新の分析の見地からすれば、これはまさにそのとおりである。生産それ自身が、実際に、自己のために市場をつくり出しているのである。すなわち、生産のためには生産手段が必要であるが、それらの生産手段は社会的生産物の特殊な分野をなしている。そして、この分野は、労働者のある部分をやとい、特殊な生産物を生産するが、この生産物は、一部はこの分野の内部で実現され、一部は他の分野との一消費資料の生産との一交換において実現される。蓄積は、実際に、所得（消費資料）にたいする生産の超過である。生産を拡大する（用語のカテゴリー的な意味では「蓄積する」）ためには、まずはじめに生産手段を生産することが必要である。だが、そのためには、したがって、生産手段を製造する社会的生産部門の拡大が必要であり、労働者をそれに吸引することが必要で

---

<sup>3</sup> 同様な需要不足による成長の困難を訴えたトマス・ロバート・マルサスは、消費への傾向の高い地主の所得を補償するべきであるとした。カール・ハイน์リヒ・マルクスは、レーニンが書いているように、再生産表式によって単純なシスモンディ流の恐慌論を乗り越えていた。マルクスの場合、消費財部門と生産財部門のアンバランスから資本主義的成長の困難を導出している。

あるが、彼らは消費手段にたいしても需要をもたらず。したがって、「消費」は「蓄積」のあとについて、あるいは「生産」のあとについて発展する。—このことがどれほど奇妙に見えようとも、資本主義社会では、これ以外ではありえない。したがって、資本主義的生産のこれら二つの部門の発展においては、ぜひとも均等がなければならないわけではなく、反対に、不均等こそが不可避なのである。周知のとおり、資本の発展法則は、不変資本が可変資本よりもいっそう急速に増大すること、すなわち、新たに形成される資本のますますの多くの部分が、生産手段を製造する社会経済部門にむけられるということにある。したがって、この部門は、消費資料を製造する部門よりも、必然的により急速に成長する。すなわちシスモンディが「不可能なこと」、「危険なこと」と公言した、まさにそのことが行われるのである。したがって、個人的消費のための生産物は、資本主義的生産の総量のうちでは、ますますより小さな部分を占めることになる。そしてこのことは、資本主義の歴史的「使命」とその独特の社会的構造とに照応している。すなわち、その使命はまさに、社会の生産力の発展（生産のための生産）にあるが、その社会構造は、住民大衆による生産力の利用を排除しているのである。<sup>4</sup>

19世紀においては、資本は労働者を雇用するための基金を含んでおり、現在のように物的設備だけを指していなかった。古典派経済学にはなく、マルクス経済学から用いられたよう用語として、可変資本は労働者の雇用基金を、不変資本は生産のための諸設備や財貨を意味している。<sup>5</sup>

生産された財貨のうち、消費された残りは全て資本として蓄積される。売れ残って打ち捨てられる財貨はないのであって、この意味でセイ法則は常に成り立つ。資本蓄積のうち、不変資本の増大の部分は、結局生産設備の購入になるので、生産財生産部門への需要となる。また、可変資本の増大の部分は、新たに雇用する労働者の賃金として支払われる。したがって、レーニンも書いているように、これは消費財生産部門への需要となるのである。つまり、生産に比べて消費がいかに少なく見えても、資本蓄積は生産設備の購入や新規雇用の労働者の消費になるので、経済を恐慌に導くような需要不足は起きようがない。<sup>6</sup>

---

<sup>4</sup> 同上、137–138 ページ。

<sup>5</sup> マルクス経済学では、労働だけが利潤の元となる剰余価値を生み出すことができると考える。そこで価値が増大する資本という意味で可変の語が、価値が変化しないという意味で不変の語が用いられている。

<sup>6</sup> 賃金を生産の前の前払いと考えるか、生産後の後払いと考えるかは、生産が連続して行われている限りどちらでもいいことである。現在の経済学では今年の国民所得の事後的な分配分が利潤と賃金になるので、後払いと考えていることになる。これに対して、古典派経済学では、実際の労働の前の前払いであると考えたの、資本家から見たら資本の前貸しの一環であることになるのである。

レーニンは、農本主義的な傾向を持つシスモンディの理論の浅薄さが、彼のリカードウ地代論批判に現れていると考える。

彼は、このばあい、小農民の純粋な思想的代表者として乗りだしている。彼はリカードーを反論するというよりも、むしろ、一般に商品経済と資本主義とのもろもろのカテゴリーを農業にうつすことを、拒否しているのである。この二つの点で、彼の見地は、ロマン主義者として極度に特徴的である。第三篇、第一三章は、「地代にかんするリカードーの理論」にあてられている。シスモンディは、リカードーの学説が彼の理論と完全に矛盾していることをいきなり言明して、つぎのように反論している。一利潤の一般的水準（リカードーの理論はこのうえにうちたてられている）はけっしてさだまることがなく、資本の自由な移動は農業では存在しない。農業では、生産物の内在的価値を観察しなければならないが、この価値は、市場の動揺には依存しないものであり、所有者に「純生産物」、「自然の労働」を提供するものである。「自然の労働は内在的価値において考えられた土地の純生産物の源泉である」。「われわれは、地代を、あるいはむしろ純生産物を、土地から直接に生じる、土地所有者のためのものとする。それが農業企業家からも消費者からもなにもものをもうぼうものではない」。ところで、この古い重農主義的な偏見の繰返しは、さらに道德によって結語とされる。「一般に経済学においては、もろもろの抽象とまったく同様に、絶対的仮定を信じるべきではない」！このような「理論」には、それを検討するだけの価値もない。なぜなら、「自然の労働」に反対するリカードーの一つの小さな注だけで、まったく十分だからである。これはたんに分析の拒否であり、リカードーにくらべて著しい後退をしめすものにすぎない。ここでも、シスモンディのロマン主義がきわめて明瞭に現れている。彼は、所与の過程を非難することに急で、分析によってその過程にふれることをおそれているのである。だが彼が、イギリスでは農業が資本主義的に発展している事実、農民が借地農業者と日雇労働者にとってかわられつつある事実、大陸でも事態は同じ方向に発展しつつあるという事実、を否定していないことに注意されたい。彼は、ただこれらの事実（資本主義経済について論じるにあたっては、どうしても観察しなければならなかったもの）から顔をそむけて、家父長制的な土地耕作制度のほうがこのましいという感傷的な議論のほうをえらぶのである。<sup>7</sup>

アダム・スミスの古典派経済学は、リカードウとマルサスによって継承されたが、二人は地代論においても対照的であった。日本語では重農主義と訳されるが、本来自然の力の学派を意味するフィジオクラットを評価していたマルサスは、土地が持つ生産力に地代の源を見出していた。これに対して、リカードウは、地味の違いが地代を発生させるという全く新

---

<sup>7</sup> 同上、159-160 ページ。



たな地代論を提起する。肥沃な土地と地味の劣る土地があった場合、地代がなければ肥沃な土地を借り受けた農業資本家の方が高い利潤を得ることになる。そこで、地味の劣る土地を借りている農業資本家は、地主に地代の支払いを提案して、自分に肥沃な土地を貸してくれるように言うであろう。こうして、肥沃な土地に、利潤の差額分だけの地代が発生することになる。<sup>8</sup>

シスモンディは、レーニンによれば、農業において近代的な商品経済化が十分に進んでいないことを根拠に、リカードウの差額地代の議論を否定する。そして、自然が労働して産み出すのが地代であるという、情緒的というか神秘的な議論に逃避している。レーニンはこうした反近代合理主義をロマン主義の本質と見ていた。

シスモンディはアダム・スミスの自由貿易主義の立場から出発したせいも、独自の学説を提起した後も保護貿易主義に批判を加えている。レーニンは、シスモンディの保護貿易主義への批判についても論旨の通らないものとした。

保護貿易主義は、資本主義の「社会的＝政治的要因」である。ところが、シスモンディは、それを資本主義とではなくて、国民一般というもの（すなわち独立小生産者の国民）と対比している。彼は、おそらく、保護貿易主義をインドの共同体とでも対比して、いっそう明瞭な「不合理さ」や「有害さ」をえることもできたであろう。しかし、この「不合理さ」とうことは、保護貿易主義にではなく、まさに彼のそういう対比にあてはまることである。シスモンディは、保護貿易主義が大衆の犠牲においてごく少数のものに有利になるということを証明するために、子供らしい計算をしている。しかし、これはなにも証明するまでもない。なぜなら、このことは、保護貿易主義の概念そのものからすでに明らかだからである（直接に奨励金があたえられようと、あるいは外国の競争者がおしのけられようと、どちらでも同じことである）。保護貿易主義がみずから社会的矛盾をあらわにしていることは、争う余地のないところである。しかし、保護貿易主義をつくり出したその体制の経済生活には、はたして矛盾がないのであろうか？ 反対である。その生活全体が矛盾にみちている。そして、シスモンディ自身、そのあらゆる叙述のなかでこれらの矛盾を指摘している。シスモンディは、この矛盾を、彼自身が確証し

---

<sup>8</sup> 古典派経済学は労働以外の生産要素に余剰を生み出す生産性を認めない。物的な資本や土地は人間が労働によって使用しない限り何かを生産することがないので、結局労働だけが生産的であると見るのである。これに対して、現代経済学は全ての生産要素に生産性を定義している。一見するとシスモンディの「自然の労働」に同じように見えるが、現代経済学の分配理論をただ限界生産力説の名で呼んでいるだけなのである。たとえば、物的資本の新規の増加がどれだけ生産を増大させるかで報酬が決まるのが、経済のメカニズムであると言っているだけで、神秘的な生産力なるものの存在を前提にしているわけではない。

た、経済体制のそれらの矛盾から結論するかわりに、経済上の矛盾を無視して、その所論を、まったく内容のない「無邪気な願望」にかえてしまっているのだ。彼は、彼の言葉によれば大きくない集団の利益に奉仕するこの制度を、国の経済全体におけるこの集団の地位および利害と対比するかわりに、それを、「一般の福祉」という抽象的な命題と対比している。<sup>9</sup>

レーニンもまた、シスモンディのロマン主義の要素を、経済の現実を直視するリアリズムの欠如、反近代の不合理主義に見出しているのだが、それに加えて復古主義的な傾向もあげている。もっとも、単純な復古主義というよりは、啓蒙的な契約社会を嫌い、有機的社会観に立った伝統社会を憧憬する傾向と言った方がいいかもしれないが。

シスモンディはこう言っている。「経済学のなかでは、私を、社会的進歩の敵であり、野蛮で強制的な制度の別動隊のようにいつている。いや、私は、すでにあったものを欲しているのではなく、現在のものにくらべてなにがしか善いものを欲しているのである。私は、過去と比較することなしには、現在を判断することはできない。私が社会の永遠に必要なものを古い廃墟によって証明するとしても、私は決してその廃墟を復活しようとのぞんでいるのではない」。ロマン主義者の願望は（ナロードニキのそれと同じく）、きわめてりっぱなものである。そして、資本主義の矛盾を意識することは、彼らを、これらの矛盾を否定するめくらのような楽観主義者よりも、高いものにしている。ところで、シスモンディを反動家とみとめるのは、決して、彼が中世にたちかえることを欲したからではなくて、まさに、彼が実践上の願望において「現在を過去と比較し」、将来とは比較しなかったということ、まさに、彼が「社会の永遠に必要なものを」、最新の発展の傾向によってではなく、「廃墟」によって「証明した」ということのためである。<sup>10</sup>

## 2. シュミットによるドイツの政治的ロマン主義批判

シュミットは自らの考える政治的なものを無化するという観点から、ロマン主義的な思考法を批判している。彼は最初にロマン主義を根本において規定する概念としてオッカジオ（occasio）を切り出している。

これはたとえば機因、機械、おそらくはまた偶然といったような観念によって置き換え

---

<sup>9</sup> 同上、180–181 ページ。

<sup>10</sup> 同上、238 ページ。

られ得る。しかしこの概念がその本来の意味を得るのは或る対立を通じてである。この概念は *causa* という概念の否定、すなわち思量し得る因果性の強制の否定であり、なおまたあらゆる規範への拘束の否定なのだ。これは解体的な概念である。なぜなら生と自称とに首尾一貫性と秩序を与えるもの一原因となるものの機械的な思量可能性であれ、合目的的または規範的な関連であれ—はすべて、単に *occasionell* なるものの観念とは一致し得ないからである。<sup>11</sup>

シュミットはこうした、非合理主義的な傾きを持った偶然的発生論に機会原因論という名称を与えている。神を第一原因とするこの機会原因論の、最も世俗的な一亜種がロマン主義ということになる。

これは壮大な世界像であり、神の優越性を無限の信じられないほどの偉大さに高めるものである。この特徴的にオッカジオネルな態度はそのまま保たれながら、神のかわりにたとえば国家とか民族とか、あるいはまた個人の主観が最高の決裁者および決定的な因子となることもあり得る。この最後の場合がロマン主義である。<sup>12</sup>

シュミットがここで言うロマン主義のイメージを、ドイツ観念論哲学から得ていることは明らかであろう。ロマン主義は必ずしも感情的な議論ではなく、それ自体が冷徹な論理的体系を纏っている場合もありうる。

ロマン主義は十八世紀の合理主義に反対する運動と解することができる。しかしこのような反対運動は非常に多種多様に存在するが、近代的合理主義をすべてロマン主義と名づけることは皮相の見であろう。シェリングの自然哲学のなかには、ロマン主義が「愛なき叡智」と感じた哲学的反対があった。抽象的合理主義に反対することは同じであっても、感情的反対者は哲学的反対者とは異なる。<sup>13</sup>

ヨハン・ゴットリープ・フィヒテからフリードリヒ・シェリングやゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルへと至るドイツ観念論の展開は、最も合理主義的なイマヌエル・カントの哲学へのロマン主義的な反論であった。

フィヒテは彼の『全知識学の基礎』のなかで、自分の哲学の体系的部分はスピノザ主義であるが、ただ各人の自我そのものが最高の実体をなすことだけが違っていると認め

---

<sup>11</sup> シュミット (1925)、翻訳 23–24 ページ。

<sup>12</sup> 同上、24 ページ。

<sup>13</sup> 同上、66 ページ。

ている。このようにして抽象的合理主義の特徴をなす抽象的概念と具体的存在との二元論は克服され、「生きた統一」が獲得された。ただフィヒテにあっては古い合理主義がなお優勢だった。非自我と因果関係に入る自我は、非自我のなかに「変形し得る質料」を、理性的に処理し変形し得るものを見た。シェリングはその後たしかに「有機体」の観念のなかに、自然と精神の分裂を克服する全体を築きはした。しかしヘーゲルの哲学においてはじめて大きな体系的完成は達せられ、絶対的主体は生成しつつ自己をいろいろの対立として流出するのである。<sup>14</sup>

言うまでもなく、ドイツ観念論の体系は高度に論理的思弁の建設であって、その意味で合理主義的な外観を持っている。しかし、その論理的構築物が指し示す世界観は、実に非現実的であり、ロマン主義の特徴であるリアリズムの欠如という決定的兆候を示している。

ロマン的な合理主義や主知主義と感じられたものは、世界をこのようにイローニッシュに非現実化して空想的な構成に変えることなのである。これによってまたあの二つの新しい実在—人類と歴史—もまた人間が「使用」し得る形象となる。ロマン主義者の自己再現のなかに自己客観化がないことは、彼らの共同体哲学に政治的思想がなく、また彼らの歴史構成のなかに歴史的感覚がないのと同様である。<sup>15</sup>

全てが自分の構成した主観であるから、絶対の他者というものが存在しない。互いに自由にならない他者と対峙するところにしか政治は生まれないのだから、ロマン主義者がリアリズムを欠如しているのと同時に、政治をも欠如していることは当然なのである。

ロマン主義的機会原因論の特殊性は、機会原因論の第一の要因である神を主観化することにある。個別化され孤立させられ解放された個人は、自由主義的市民的社会では中心となり、最後の決裁者となり、絶対者となる。自分は神であるという幻想は勿論汎神論的もしくは万有在神論的な感情のなかにしか存在し得なかった。それ故この幻想は心理的現実において他のそれほど主観的ではない城館と結びついた。けれども主観は依然として自己の経験のみが唯一の興味あるものであると申立てた。この要求は整然たる市民的秩序のなかでしか満たされ得ない。それ以外のところでは、妨げられることなく自分自身の気分のみ心に向けるための「外的条件」が欠けているからである。<sup>16</sup>

ロマン主義はしばしば、中世などの過去の共同体を理想化し、そこへと回帰することを主

---

<sup>14</sup> 同上、66—67 ページ。

<sup>15</sup> 同上、93 ページ。

<sup>16</sup> 同上、124 ページ。

張するが、ロマン主義自体近代市民社会を前提にした現象なのである。近代的自我が、他者と政治的に対峙し、他者の抵抗と反発のなかで自己の主観的目的を実現していくことを拒絶したときに、リアリズムへの拒否が生まれる。それがロマン主義であると、シュミットは述べているのである。

シュミットは政治的ロマン主義者が政治そのものを拒絶することを批判しているのであって、ロマン主義的な心性を全面否定しているわけではない。そのことは、ドン・キホーテについての印象的な叙述から明らかである。

ロマン主義的に構成された機会の政治の不滅の典型は、政治的ロマン主義者ではなくロマン主義的な政治家だったドン・キホーテである。より高い調和ではなく法と不法の区別を見、自分に法と見られるほうを選ぶ能力を彼は持っていた。これは政治的ロマン主義者にはまったく欠けていた能力であり、だからこそまさにシュレーゲルやミュラーの正統主義は彼らのほうに対する無関心から説明されねばならなかったのである。自分の考える騎士道の理想への熱狂と想像上の不法に対する激昂とがドン・キホーテを駆って外的現実の気ちがいじみた無視にみちびくが、しかし彼は自分の嘆きを文章に練って現代批判に仕立てて、審美的に自己の主観性にとじこめることはしなかった。彼の誠実な熱意は、ロマン主義的な優越性などというものが成り立たぬ状況へ彼をみちびき、彼の闘いは空想的で無意味なものではあったが、それはやはりみずから危険に面する闘いであり、アーダム・ミュラー流の素材に対する芸術家の、もしくは革に対する靴屋の闘いのようなより高い性質の闘いではなかった。彼の熱狂は真の騎士が自分の身分について抱くそれであって、市民階級人が貴族階級の印象的な像について抱く熱狂ではなかった。<sup>17</sup>

ドン・キホーテの場合、たとえ現実を無視した無謀なものであっても、実際に闘っているだけよいのである。ロマン主義者は偽りの中世人であって、政治的闘いの場には出て行かずに、主観のなかに審美的に閉じ籠っているのみである。シュミットは政治の基本は敵と友とを区別することと考えたが、政治的ロマン主義者は真の他者に直面しないために、敵も友も持つことはない。ドン・キホーテが持っていると思われる法と不法を区別できる能力とは、友と敵とを区別できる能力のことでもある。

こうして何もしない政治的ロマン主義は、無力であるがゆえに政権にとって無害である。政治的ロマン主義は結局自分の存在意義を賭けて政権を賛美するしかない。権力は権力であるがゆえに肯定される。こうした政治的墮落は、右翼的であっても左翼的であっても、国粹主義的であっても国際協調主義的であっても起こりうることなのである。

---

<sup>17</sup> 同上、186-187 ページ。

主観主義化された機会原因論として政治的ロマン主義は自分自身に対しても、数々の心理的繊細さや告白者の微妙な感覚を持っていたにもかかわらず、その精神的本質を理論的あるいは実践的＝具体的な関連のなかで客観化する能力を持たなかった。その主観主義によって政治的ロマン主義は概念や哲学体系へではなく、あの有機的な受動性と一致し得る或る種の抒情的な体験表現へむかい、また芸術的才能が欠けている場合には、前に述べたような他人の活動への半ば抒情的、半ば知的な伴奏へ向った。解説的な性格描写や、標語と視点や、協調と反芻や、暗示と結合する比較をもって、多くの場合に昂奮して騒々しく、しかしいかなる場合も自分自身の決断、自分自身の責任を持たず、みずから危険を冒すことなしに、政治的事件の後について行くのがこの伴奏なのである。政治的活動はこれではおこない得ないが、批評は勿論可能であって、革命であれ復古であれ、戦争であれ平和であれ、ナショナリズムであれインタナショナリズムであれ、帝国主義であれ帝国主義の放棄であれ、すべてを論評し、イデオロギー的に誇張することができる。その方法はここでもまた、問題となっている対立が本来属する領域、すなわち政治的な領域から、より高いものへ、復古的な時代であっては宗教的なものへの機会原因論的な逃避であり、その結果は絶対的な政府支持論、つまり絶対的な受動性であり、その行動は他人の決断や責任から得られた思想の抒情的＝小理屈的な装飾だった。政治的活動がはじまるところで政治的ロマン主義は終わる。

### 3. 現在におけるロマン主義的なものの危険性

本稿では最初に、ロマン主義の特徴としてリアリズムの拒絶を摘出しておいたが、レーニンとシュミットの議論を詳細に論じた後でも、基本的に大きく間違っていなかったことがわかるだろう。その特徴づけに、レーニンの経済的ロマン主義批判から、経済的諸問題を政策や改良によって解決するのではなく、中世の有機的共同体の停滞を理想化して問題そのものを一種の幻影をみなすという点を加えることができる。それは経済学的分析の拒絶と否定ということに繋がるものであって、現代も奇抜な政策を主張する似非理論が登場する温床になっている。

シュミットの政治的ロマン主義批判からは、かつてのドイツのように近代市民社会が未成熟の状況下、近代的自我の拡大願望が歯止めなく大きくなり、個人と個人の政治的対話を拒否するようになって事態としてロマン主義を見る視点を得ることができた。近代市民社会の未成熟という特質は日本も共有するものであり、現代においてすら忖度政治の問題点を取り沙汰される原因となっていると言える。結局のところ、ロマン主義の陥穽に社会を落ち込ませないためには、現実や他者という自己の外の異質なものと対峙や直面を恐れない勇気が必要だということである。

かつて、マイケル・ハートとアントニオ・ネグリは現代世界を帝国の秩序として捉える視

点を打ち出した。

私たちの打ち出した〈帝国〉という概念は、グローバル政治においては単独行動主義化  
多国間協調主義が、あるいは親米主義か反米主義かという二者択一しかありえないと  
する議論に、斜めから切り込むものである。まず一方で私たちは、たとえアメリカ合衆  
国のような最強の国家であれ、一つの国民国家が「単独行動をとり」、〈帝国〉のネット  
ワークを構成する他の主要な国々との協力なしにグローバル秩序を維持することはで  
きないと主張した。また他方で私たちは、現在のグローバル秩序はすべてのメンバーの  
平等な参加を特徴とはせず、それによって支えられることもできないと主張した。それ  
ばかりか、国際連合に代表される多国間協調主義的な管理モデルにおける一連のエリ  
ート国家によってすらも支えられないのである。地域的・国家的・局地的な線によって  
区切られた、冷酷で厳然とした分裂や階層秩序こそが、現在の世界秩序を明示している  
のだ。<sup>18</sup>

現代世界は支配的な国家が意図的に統治できるようなものではない。この意味で、列強が  
世界を分割していた帝国主義の時代とは全く異なっている。ハートとネグリが帝国主義で  
はなく帝国そのものであると言うのはこのためである。

〈帝国〉が支配するのは、内部分裂や階層構造によってバラバラになり、さらには恒常  
的な戦争によって苛まれたグローバル秩序である。〈帝国〉において戦争状態は不可避  
のものであり、戦争は支配の道具として機能する。古代ローマの時代と同様、今日の〈帝  
国〉による平和も見せかけだけの偽りの平和にすぎず、実際には恒常的な戦争状態を統  
轄するものでしかない。<sup>19</sup>

恒常的な戦争状態における敵とは誰であろうか。〈帝国〉自らがそのような仮想敵をつく  
り出し出すことで民を統治している。ハートとネグリはそう考えている。

〈帝国〉の暴力を正統化するためには、敵と無秩序の脅威とが恒常的に存在することが  
必要である。だとすれば、戦争が政治の基盤をなすものであるときに、敵が正統性を構  
成する機能を果たすとしてもなんら驚くべきことではないだろう。こうして敵は、もは  
や具体的で局所化可能なものではなくなり、〈帝国〉という名の楽園に棲むへびのよう  
な、姿を見せては消えたとらえどころのない存在となっている。敵は未知で見えないの  
に、まるでオーラのように常に辺りに存在しているのだ。ぼんやりとした未来に敵の顔

---

<sup>18</sup> ハート＝ネグリ（2004）、翻訳上巻 17－18 ページ。

<sup>19</sup> 同上、18 ページ。

が浮かび上がり、正統化が衰退した場所で、その支えとなる。<sup>20</sup>

支配者は、少なくとも彼らが言うほどには実体のない幻の敵への人民の恐怖をあおること、自らの支配を正当化する。ここで敵は完全に主観的な幻影となっており、人民は自らが作り出した敵への恐怖から支配者の統治に進んで従っていく。ここには、シュミットが指摘した、政治的ロマン主義者が無条件的かつ絶対的に政府に従うのと同じ心理的構造がある。

ハートとネグリは、こうした帝国による目に見えない支配に抵抗し、可能ならば変革していく主体にも考察を進めている。もし、彼らがそうした変革主体をありのままの世界化された大衆に求めたならば、中農層をそのまま理想化したシスモンディと同じ批判を受けないわけにはいかない。しかし、もちろん彼らの視点はそうではなく、相互のコミュニケーションによって、変革主体は自らをも変革していかなければならないというものである。二人は、毛沢東が、工業プロレタリアートを革命の主体と考えるマルクス主義の伝統に反して、貧農層に期待した本当の意味を次のように書いている。

二〇世紀の中国農民階級は、マルクスが研究した一九世紀フランスの農民と変わらないほど孤立し、相互のコミュニケーションも欠落していた。毛沢東は、多数の農民階級と少数の工業プロレタリアートからなる中国社会においては、農民階級の政治参加を他の国々よりも広範に推進しなければならないこと、さらには中国革命を実現するには、農民による共産主義革命の形態を考案しなければならないことを認識していた。<sup>21</sup>

農民戦争や農民闘争はもはや、厳密に保守的な関係性において耕作地を守ることに向けられるべきではなく、農民の社会的生をまるごと変革することを目指す生政治的な闘いにならなければならない。コミュニケーション能力を発達させ能動的になることによって、農民階級は他と分離した政治的カテゴリーではなくなり、都会と田舎の分裂の政治的意味は減少する。ここに、農民革命が最終的勝利を手にするのは農民階級（分離した政治的カテゴリーとしての）が終焉を迎えるときだという逆説が生まれる。言い換えれば、農民階級の最終的な政治目標は階級としての自分自身の消滅なのである。<sup>22</sup>

毛沢東は、農民を回顧的かつ固定的に理想化して考えるようなロマン主義の轍を踏まなかった。それは当然である。彼にとって革命を成し遂げるためには、現実を穴が開くまで見詰めることが絶対に必要だったからである。こうして、農民を変革主体として未来に向かっ

---

<sup>20</sup> 同上、70 ページ。

<sup>21</sup> 同上、206 ページ。

<sup>22</sup> 同上、207-208 ページ。



て陶冶していくことが必然的な戦略となったのである。

現代においては保守も革新も、ありのままの大衆を変化の主体として見る、ロマン主義的な傾向を強く持っているように思われる。それはロマン主義の構造的力がなせる業として、結局は現状を全面的に肯定するような言辞しか生み出すことがないであろう。運動のなかにおいて人々が自らを未来に向けて批判的に乗り越えていくこと、そして、それを担いうる政治主体を持つということが、リアルな変革への唯一の道であり、それ自体が、変革がなされたという事実そのものなのである。

おわりに

現代においてもロマン主義的な悪しき志向が蔓延していると感じてきた。それは退嬰的な兆候であり、日本社会にとって大いに危険なものである。

一昨年、ずいぶんマスコミで取り上げられ、タレント出身の某政治家も推進していた経済政策論に、現代貨幣理論というものがあった。それは、国家紙幣を次々に発行しさえすれば、景気は回復し、日本経済の成長が達成できると主張していた。筆者もいくつかの論文や講演で批判したが、経済学の見解や現実の分析を踏まえない空想的な議論という意味で、レーニンの批判したシスモンディの経済的ロマン主義と同様の代物である。中央銀行券に比べて国家紙幣は信用力が高いので、際限なく発行しても過剰にはならないという議論は全く理解できない。アメリカの論者は、異次元緩和策をとっている日本でインフレーションが起きないことを以って持論の実証としていた。であれば、うまくいっている日本に、さらにあえて野放図な緩和策を導入する必要はないのではないか。つまり、彼女らの実証なるものも、都合の良い現実だけを切り貼りしているものに他ならない。

日本は新型コロナウイルス感染の第3波の真ただ中で、2021年を迎えた。首都圏に緊急事態宣言を出すにあたって、菅義偉総理大臣は「国民の皆様の協力の下、コロナとの戦いに勝利を収めます」という趣旨の発言を行った。これでは政権自体が政治的ロマン主義の思考停止状態に陥っていると言われても仕方がないのではないか。勝利を収める根拠がどこにも見当たらない。首相自体も確信が持てていないということが、国民には見え透いている。経済か感染予防かという二者択一ができないまま、政治的決断を先送りしていることが明らかである。結局成り行きに任せることになっているのだが、それは政治を放棄しているということである。シュミットが最も恐れたことが、現在の日本で起こっている。

#### 【参考文献】

レーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて：シスモンディとわが祖国のシスモンディ主義者たち」『レーニン全集』第2巻、大月書店、111-264ページ、1954年。

Hardt, M. and A. Negri, *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*, Penguin Books, New York, 2004. (幾島幸子訳『マルチチュード 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』上下、日本放送出版協会、2005年。)

Schmitt, C., *Politische Romantik*, Duncker & Humblot, Berlin, 1925. (大久保和郎訳『政治的ロマン主義』みすず書房、1970年。)